

令和7年4月23日

釜石市議会議長 千葉 榮 様

会派名 令和クラブ

報告者 工藤聡一郎

## 会派視察調査報告書

当会派所属議員による視察調査を下記の通り実施しましたので、報告いたします。

### 1. 視察項目

- ① 東京電力廃炉資料館の見学
- ② 東日本大震災・原子力災害伝承館の見学

### 2. 視察日程

令和7年3月27日（木）～ 令和7年3月28日（金）（2日間）

### 3. 参加者

菊池秀明、 佐々木聡、 高橋松一、 工藤聡一郎

### 4. 東京電力廃炉資料館の見学について

- ① 日時 令和7年3月27日（木）14:00～15:00
- ② 場所 東京電力廃炉資料館（福島県双葉郡富岡町）

#### ③ 内容

東京電力廃炉資料館は原子力事故の真実と廃炉事業の現状等を紹介する施設として双葉郡富岡町の福島第二原子力発電所をPRする施設であった旧エネルギー館を平成30年にリニューアルして設置された。入館料は無料で、案内ガイド付きのツアー形式により見学することができる。

廃炉作業の現状と地震発生から原発事故への対応等について映像シアターの視聴とガイドによる説明を受けた。廃炉作業における技術開発、発電所の敷地内で発生する汚染水を減少させるための取組と処理水の海洋放出までのプロセス、デブリの取り出し試験について映像シアターにて紹介されていた。

廃炉作業における映像シアターによる原発事故の発生と廃炉状況の現状について紹介された。シアターホールでは、当時の中央制御室の様子が再現されており、地震発生時における緊急停止、津波到達による電源喪失後の原子炉への注水のための電源復旧の様子が紹介されていた。

反省と教訓について、事故を防止できなかった要因として、過酷事故のリスクの過小評価、津波対策の不備、事故対応の準備不足の根本原因が安全意識、対話力、技術力の背後原因との負の連鎖となったことであった。安全水準を高めるには負の連鎖を断ち切る必要があったと映像とパネルで紹介されていた。

#### ④ 所感

廃炉資料館では東日本大震災による原子力発電所の被災から原発事故発生時の対応と廃炉作業の経過について紹介されていたが、原発事故に関してはイメージで語られることが多いため、原発事故について将来にわたって語り継いでいくには、実際に起きたことを正しく受け止めていかなければならない。

福島第一原発の廃炉作業に向けて地下水流入防止のための遮水壁の設置、放射性物質が回収された処理水の海洋放出が実施され、原子炉内部にある燃料デブリの取り出しに向けた調査や試験的取り出しに着手しているとのことであった。原子力発電所の廃炉は世界的にも実例が少なく、廃炉作業の完了には時間を要するものであり、廃炉作業の進捗について今後も正しく理解することが重要である。

原発事故の根本原因について過酷事故対策や津波対策の不備などが挙げられ、津波による原発の電源喪失、その後の事故につながったが、自然災害は人間の想定を大きく超えるものであり、今後の災害対策として人々の安全を確保するには最大限の対応が必要であり、このような教訓を後世に伝える必要がある。



## 5. 東日本大震災・原子力災害伝承館の見学について

① 日時 令和7年3月28日（金）09:00～10:45

② 場所 東日本大震災・原子力災害伝承館（福島県双葉郡双葉町）

### ③ 内容

東日本大震災・原子力災害伝承館は福島県双葉町に所在する福島県が設置した施設で、令和2年に開館している。福島県での地震・津波被害の記録、原発事故による複合災害の実態、復興への歩みについて展示されており、被災を経験した語り部による講話が1日4回実施されている。

シアターホールでは、福島県での震災発生時の様子や津波が沿岸部を襲う映像、原発事故発生等所の映像が流れ、アニメーションと組み合わせた映像が大型スクリーンに映し出されていた。「災害の自分事化」、「福島の実験と教訓の未来の検証」をメッセージとして来館者に伝える役割を担っている。

案内ガイドにより展示されている資料について説明を受けた。震災前の暮らしから東日本大震災による地震・津波、原発事故発生までの時系列による資料、福島県原発が立地していた地域の原発との関わりや日常生活の様子が分かる資料が展示されていた。また、津波による被害を物語る実物資料、震災と原発事故の複合災害下の活動時に使用されたものなどが展示されていた。

原発事故の発生から一週間の実像や原発事故によって長期の避難生活を強いられた県民の証言などが映像に映し出されていた。原発事故発生後の屋内退避指示による被災地の物資輸送への影響、避難指示の拡大による長距離避難の様子と避難区域内の病院で患者が取り残されていたことなどが紹介されていた。

原発事故の影響が長期化するなかで、除染、風評被害の払拭、健康の影響への取組などが紹介され、除染作業の使用される防護服の展示、甲状腺検査に使用された機器の展示と実施された健康調査の説明、福島県の農産物の価格の推移、子どもの健康状態についての調査資料などが展示されていた。

震災語り部による講話では、「伝統文化存続の危機と伝承」をテーマとして双葉町出身の方の講話を受講した。双葉町で活動していた創作太鼓の「標葉せんだん太鼓」と盆踊りについての講話であった。原発事故による避難指示でトラックに積まれてあった太鼓を運び出しての避難、各地の行事などでのステージで演奏が行われていること、盆踊りの文化があるハワイのマウイ島での交流と太鼓の伝承が行われているとのことであった。また、双葉町から県内外の避難先各地での盆踊りによる交流が行われていたとのことであった。

#### ④ 所感

福島県の伝承館は災害の自分事化のメッセージを来訪者に伝える役割を持つ施設であるが、津波による浸水リスクが予見されながら被災を経験した本市と震災前には津波による浸水リスクが重視されておらず、津波による被害と原発事故による複合災害により長期避難を余儀なくされた福島県では震災に対する受け止め方が異なっているのだと考えられる。住民の生活に関わってきた原発の事故により突如避難地域に指定され、長期に及ぶ長距離避難に経験したこと、避難区域下で患者が病院に取り残され、移動中や移送先で命を落としたことなどの多大な苦難であったことが想像できる。震災後の復興に向け、放射線量低減のための除染や健康対策、福島県の農作物の風評被害の払拭のための取組も知ることができた。我々が暮らす地域の被害だけでなく、複合災害とその後の影響について科学的根拠に基づいて正しく理解を深め、この記録を伝えていくことが重要である。

語り部による講話では、伝統文化を残すことへの責任感、義務感から活動を行ってきたとのことであった。原発事故による長期避難で町民の居住地が分散され、避難先での活動に制約があるなかで伝統芸能の存続のために奔走してきた。震災による被災を経験した住民が流出していくなかで伝統文化の幅広い世代への伝承による地域のつながりを維持するための取組を学ぶことができた。

